

## 「外来看護論」の履修における看護学生の学び

著者	住田 陽子, 伊津美 孝子, 村上 生美
雑誌名	森ノ宮医療大学紀要
巻	12
ページ	35-45
発行年	2018-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1564/00000096/">http://id.nii.ac.jp/1564/00000096/</a>

原著

## 「外来看護論」の履修における看護学生の学び

住田陽子、伊津美孝子、村上生美

森ノ宮医療大学 保健医療学部看護学科

### 要 旨

本研究は、「外来看護論」の履修における看護学生の学びを明らかにすることを目的に実施した。対象は、本学看護学科の平成29年度3年次開講の「外来看護論」を履修した学生42名とした。「外来看護論を通して学んだこと」をテーマとし、全ての授業終了後のレポートについて、テキストデータ分析ソフトKH Coderを使用し、テキストマイニングの方法で分析した。

その結果、「看護」、「外来」、「患者」の出現回数が圧倒的に多く、共起ネットワークにおいても中心性が高かった。「世話」は高頻出ではなかったが、共起関係にある語句に「疾病」、「安心」、「送れる」、「営む」、「円滑」が描出された。また、「安心」は「安全」、「持つ」と、「円滑」は「補助」、「補助」は「診療」とも共起関係にあった。これは日本看護協会が示した外来看護の定義との関連が強いと考えられる。その他、共起ネットワークの結果から、患者のニーズや患者との関わりについて「外来」という条件を加えて考察していたといえるが、外来特有の語句の出現の様相からは、外来看護の実態を帰納的に考察することは比較的少なかったことが推測される。レポートの中で「生活」は独立した語句として使われていたか、他の語句と結びつけて使われたとしても、一定の傾向は認められず、多様な語句と結びつけて使われていたと推測される。

外来看護に関する教育の課題として、理論に基づいた外来看護の方法論が具体化できないことが挙げられ、実践を通して現場を実感し、その状況下でよりよい看護を検討する経験が必要なのではないかと考える。また、臨床現場との連携の下、外来看護について帰納的に分析し、多数の事例から一般的な結論を導き出す研究を行うことが重要である。

キーワード：外来看護、看護学生、看護基礎教育

---

連絡先：住田 陽子 SUMIDA Yoko

〒559-8611 大阪市住之江区南港北1-26-16

森ノ宮医療大学保健医療学部看護学科

## I. 緒言

わが国は、近年急速に進む高齢化に伴い、約800万人といわれる団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムを推進している。そのため入院施設では平均在院日数がますます短縮され、外来では高度な医療が行われるようになり、医療や介護が病院完結型から地域完結型へ加速している。

2016年の診療報酬改定においても、医療機能の分化・強化、連携に関する充実が柱となっており、地域の「かかりつけ医」が主治医機能を果たし、患者の状態や価値観もふまえ、医療をサポートする「ゲートオープナー」機能を確立させることをねらっている。一方、患者はライフスタイルや価値観が多様化している中で「生活者」として、治療あるいは療養と生活を両立すべく、医療者に対して様々なニーズを持っている現状がある。

そのような中で、外来看護について数間<sup>1)</sup>は、「外来で看護師が対応する時間は、患者が帰宅後に自己管理する時間に比べ、一瞬である」という外来看護の特徴を挙げ、患者に提供する看護の内容として、身体管理技術の提供、心理的適応の促進、社会資源の紹介・導入の3つを挙げ、それらを提供する際には相談技術が求められるとしている。そして、注意を共有すること、自尊心を尊重すること、成功体験を意識化させること、選択を支えることが、期待される成果につながる相談技術のポイントであると述べている。これらは多様な患者に個別性を重視して臨機応変に対応するための専門的なスキルであり、実践知や経験知を活かすことはもちろんのこと、外来看護師に対する継続的な教育が必要であることを示している。

外来看護に関する教育の現状について、先行研究を概観すると、現任教育では接遇教育、倫理教育に関する研究<sup>2)~5)</sup>、あるいは勉強会等の実践報告<sup>6),7)</sup>が散見されるのみであり、看護基礎教育の中では実習での成果の報告<sup>8)~10)</sup>のみに留まっている。講義や演習といった、いわゆる教育機関内の授業についての研究成果は見当たらない。

看護学テキストにおいては、外来看護の総論は一つの章の中の小項目にまとめられている<sup>11)</sup>。各論的には、周手術期において術前の検査・オリエンテーション・説明、ならびに、術後の創処置、検査、リハビリ等、外来で行うことが増えてきた現状をふまえ、周手術期に限定した外来看護師の役割や外来看護の方法論を記しているテキスト<sup>12)</sup>もある。その他、「外来」という語句は散見されるが、系統的な表記であるとは言い難い。つまり、外来看護に関する教育は具体的な柱が明確ではなく、看護基礎教育においては、教育機関や教員の裁量に委ねられているのが現状であるといえる。

本学看護学科は2011年度に開設し、2013年度より「外来看護論」を開講している。学科専門科目群の統合分野に位置づけ、3年次前期に1単位15時間の授業を展開している。その内容は、前述のような医療が施設から地域へ移行している今日の社会情勢をふまえ、地域包括ケアシステムや診療報酬などの政策が外来看護にどのように影響しているかを中心に構成している。本科目は選択科目であるが、後期に領域別臨地実習を控え、対象者の療養の場と必要な看護を包括的に理解する必要から履修を勧めている。また筆者らは、外来看護の現状と課題、本質、教育のあり方等について、2014年から臨床看護師らともディスカッションを重ねてきた。

そこで、外来看護の教育体系の構築を実現するための第一段階として、本研究では、「外来看護論」を履修して学生が何を学んだのかを明確にし、それを「外来看護論」の教授における成果の1つと捉え、今後の外来看護に関する教育のあり方を考える上での一助とする。

## Ⅱ. 研究目的

「外来看護論」の履修における看護学生の学びについて、最終レポートを通して明らかにする。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 「外来看護論」の概要

3年次前期に開講している1単位（15時間）の選択科目であり、2017年度履修登録者は43名であった。

医療施設における在院日数の短縮化が進み、医療は施設完結型から地域完結型へ移行してきているという今日の医療の動向や現状を理解し、外来看護の役割、課題について学修することをねらいとしている。

方法としては、テキストは用いず、参考図書、厚生労働省や日本看護協会が発信している資料、研究論文を使用し、学生が考察やディスカッションを行うことを中心に進めている。

シラバス<sup>注1)</sup>に示した学修目標は以下のとおりである。

- ①外来看護の時代的変遷について学修できる。
- ②外来看護における患者・家族の様々なニーズについて考えることができる。
- ③医療政策に伴う医療情勢や社会情勢に関心を持ち、医療に関する国民のニーズについて考えることができる。
- ④地域連携について学修できる。

回	学修内容	事前課題
1	教科目ガイダンス 講義：外来の時代的変遷と今日の動向	
2	個人ワーク：受療行動調査の分析	「平成 26 年受療行動調査の概況」の抜粋資料を熟読する。
3	外来におけるニーズと看護の機能 個人ワーク：研究論文を熟読し、患者のニーズ、私見を記述する。	事前配布資料を熟読する。
4	講義：医療施策（診療報酬の改定）と外来看護	
5	地域包括ケアシステムと外来看護 グループディスカッション：地域包括ケアシステムにおける看護の役割について	地域包括ケアシステムの事例を読み、グループディスカッションに臨む。
6	講義：外来における他職種連携 個人ワーク：研究論文を熟読し、考察したことを記述する。	事前配布資料を熟読する。
7	講義：外来看護の現状と課題（A 病院外来師長による講義）	
8	グループディスカッション：これからの外来看護について	

注1) 「外来看護論」シラバスは、森ノ宮医療大学学務システム (<https://portal.morinomiya-u.jp/up/faces/login/Com00504A.jsp>)、のログイン画面の「シラバスの閲覧はこちら」のリンクより、検索することで確認が可能である。

## 2. 対象

本学看護学科の2017年度3年次開講の「外来看護論」を履修した学生43名のうち、レポートを提出し、研究参加に同意の得られた42名とした。

## 3. データ収集方法

研究参加に同意が得られた学生42名のレポートの内容をMicrosoft Wordファイルに入力し、データ化した。レポートは全ての授業が終了した後課したものであり、テーマは「外来看護論を通して学んだこと」、1600字以内で記述したものである。授業最終回の1週間後を提出期限とした。

## 4. 分析方法

テキストマイニングの方法を用いて分析した。

データの準備として、データの誤字や不適切な表現を、意味内容を変えないように修正し、Microsoft Excelファイルに移した。

分析に際しては、テキストデータ分析ソフトKH Coderを用いた。KH Coderは多変量解析のためのデータ要約の機能、コーディングルールを扱う機能、データ検索の機能を備えた、質的データの計量的分析を行うためのソフトウェアである<sup>13)</sup>。本研究では、レポートの中で多く出現していた語を確認するために抽出語検索を行い、語と語の結びつきを探索するために共起ネットワークを描出した。

## 5. 倫理的配慮

該当学生に対し、レポート提出時に、本研究の主旨・目的・方法・結果の公表・倫理的配慮についての説明文書、および同意書を配布し、研究参加への可否を同意書に記入後、所定の箱に投函するよう依頼した。

レポート作成者は学生であり、研究者は教員であるため、強制力がはたらかないよう、研究参加への可否・意思の撤回と成績は一切関係がないことを文書内で強調して説明した。また、レポートは記名での提出になるが、分析用にコピーをとり、匿名性の観点から、個人を識別することができないよう匿名化したうえで保存した。

分析過程において、データはインターネットに接続していないパソコン1台に入力し、セキュリティ付きのUSBに保存した。分析対象の紙媒体、パソコン、USBは施錠できる保管庫にて保管した。

本研究は森ノ宮医療大学研究支援センターの倫理審査を受け、承認を得た（受付番号 2017-064）。なお、本研究における利益相反はない。

# IV. 結果

「外来看護論」の履修登録者は43名、レポートを提出した者は42名であった。レポート提出者全員から研究参加への同意が得られたため、42名分のレポートを分析の対象とした。

1つのレポートを1文書とし集計したところ、42の文書の中で総文章数は860、総段落数は205であった。

## 1. レポート「外来看護論を通して学んだこと」の頻出語抽出

分析対象となったレポート全てから抽出された語について、出現回数の多い順に上位150件を表1に示した。

「看護」が725（単位：回、以下省略）、「外来」が601、「患者」が595と圧倒的に多く、次いで「必要」(182)、「医療」(174)、「行う」(168)、「考える」(155)、「時間」(146)、「生活」(125)、「学ぶ」(116)、「連携」(101)、「地域」(100)というように、100回台の出現回数であった。

また、外来特有の語句としては「受診」(67)、「診療」(59)、「在宅」(50)、「診察」(49)、「対応」(38)、「待ち時間」(38)、「短い」(30)、「短縮」(25)、「部門」(25)、「通院」(24)、「場」(21)、「問診」(17)が出現していた。

なお、表1で示している網かけ部分は、図2の共起ネットワークに出現する語である。これにより、共起ネットワークに出現する語は頻出語の上位に偏っていることが明らかになった。

表1 レポート「外来看護論で学んだこと」の頻出語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	看護	725	51	待ち時間	38	101	指導	21
2	外来	601	52	信頼	37	102	習慣	21
3	患者	595	53	専門	37	103	場	21
4	必要	182	54	コミュニケーション	36	104	送れる	21
5	医療	174	55	入院	36	105	分かる	21
6	行う	168	56	限る	35	106	話	21
7	考える	155	57	人員	35	107	合同	20
8	時間	146	58	問題	35	108	日常	20
9	生活	125	59	カンファレンス	34	109	判断	20
10	学ぶ	116	60	自分	34	110	療法	20
11	連携	101	61	補助	34	111	良い	20
12	地域	100	62	技術	32	112	健康	19
13	職種	97	63	受ける	32	113	実践	19
14	能力	84	64	現状	30	114	出来る	19
15	治療	73	65	講義	30	115	早期	19
16	支援	69	66	疾患	30	116	他	19
17	受診	67	67	状況	30	117	配置	19
18	増加	67	68	短い	30	118	一つ	18
19	役割	65	69	ニーズ	29	119	営む	18
20	療養	61	70	業務	29	120	円滑	18
21	関係	59	71	自身	29	121	改善	18
22	診療	59	72	増える	29	122	環境	18
23	ケア	58	73	伴う	29	123	管理	18
24	情報	56	74	安心	28	124	経験	18
25	高い	55	75	理解	28	125	効率	18
26	思う	53	76	継続	27	126	参加	18
27	提供	53	77	図る	27	127	症状	18
28	多い	51	78	知識	27	128	システム	17
29	課題	50	79	難しい	27	129	移行	17
30	在宅	50	80	負担	27	130	困難	17
31	診察	49	81	関わり	26	131	時代	17
32	家族	48	82	多く	26	132	質	17
33	重要	48	83	退院	26	133	世話	17
34	高齢	47	84	サポート	25	134	知る	17
35	求める	46	85	大きい	25	135	長い	17
36	持つ	46	86	短縮	25	136	日数	17
37	チーム	45	87	築く	25	137	問診	17
38	関わる	45	88	部門	25	138	援助	16
39	現在	45	89	様々	25	139	軽減	16
40	変化	45	90	通院	24	140	行える	16
41	医師	42	91	安全	23	141	今	16
42	病院	42	92	授業	23	142	自己	16
43	感じる	41	93	調整	23	143	十分	16
44	少ない	41	94	向上	22	144	述べる	16
45	大切	41	95	仕事	22	145	状態	16
46	病棟	41	96	実施	22	146	推進	16
47	社会	39	97	体制	22	147	前	16
48	疾病	38	98	不安	22	148	来る	16
49	人	38	99	共有	21	149	イメージ	15
50	対応	38	100	今後	21	150	可能	15

※  は、図2の共起ネットワークに出現する語、 は外来特有の語を示している。



次に、レポート全てを対象にした、語の出現回数と文書（レポート）数の関連を図1に示した。通常、出現回数と文書数の間には強い関連があり、文書数が多いほど出現回数も多くなる傾向がある<sup>14)</sup>といわれており、本研究結果においても出現回数と文書数はほぼ比例していた。

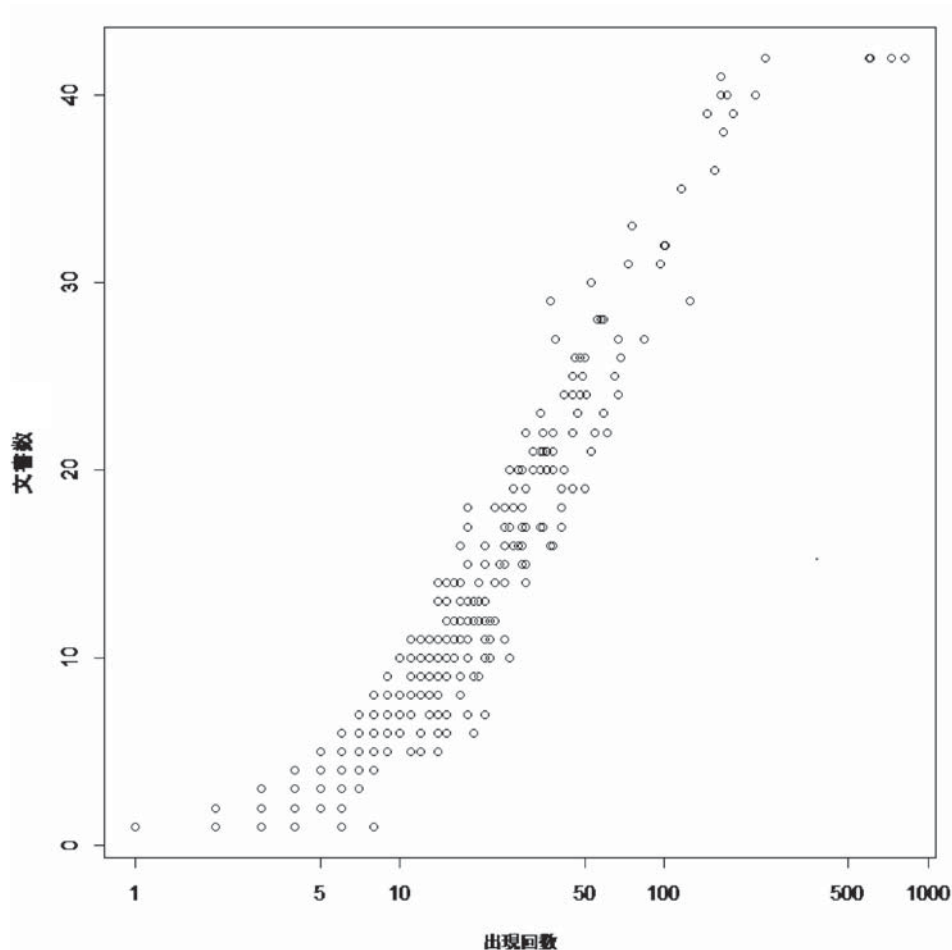


図1 出現回数と文書（レポート）数のプロット

## 2. 外来看護論で学んだことの共起ネットワーク

外来看護論で学んだことの様相を明らかにするために、共起ネットワークを描出した（図2）。円の色の濃さはネットワーク構造の中での中心性を、線の太さは共起関係の強さを、円の大きさは出現回数の多さを表している。

最も中心性の強かった語句は濃灰色の円で示された「患者」であり、次に灰色の円で示された「看護」、「医療」、「世話」が続き、その後に淡灰色で示された「外来」、「安心」、「円滑」、「補助」が続いた。これらの語と共起関係にある語句として、白色の円で示された「行う」、「学ぶ」、「考える」、「必要」、「時間」、「地域」、「治療」、「職種」、「持つ」、「安全」、「疾病」、「送れる」、「営む」、「診療」が描出された。また、「信頼」、「関係」、「在院」、「日数」もネットワーク構造を担う語句として示された。

共起関係の強さについては、「患者」—「看護」、「患者」—「医療」、「患者」—「必要」、「患者」—「時間」、「看護」—「外来」は特に結びつきが強いという結果であった。

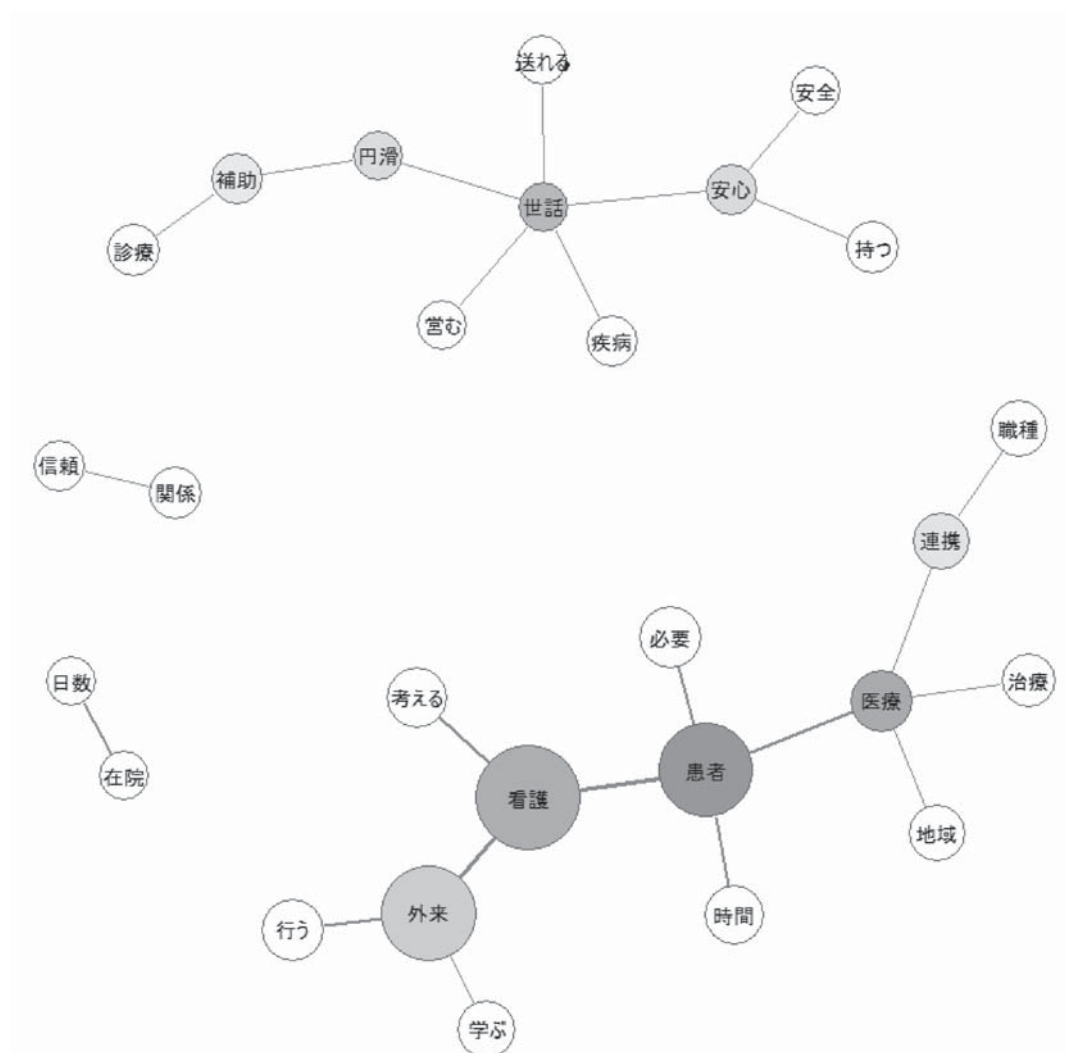


図2 レポート「外来看護論で学んだこと」の共起ネットワーク

## V. 考察

### 1. レポートにみる「外来看護論」を履修しての学び

レポートにおける頻出語で圧倒的に多かったのは「看護」、「外来」、「患者」であり、他の語句と大差が認められた。出現回数と文書数のプロットにおいても全てのレポートに出現したと考えられ、ネットワーク構造における中心性も高い。これらの概念は外来看護論の核を担っており、学生らに強く認識されたといえる。

その他にも、図2では「医療」、「世話」が中心性の高い概念として示された。しかし、表1では「医療」は174回出現しているが、「世話」の出現回数は17回であり、高頻出とはいえない。高頻出ではないが中心性が高い理由として、「世話」が限定的に解釈されていることが考えられる。授業においては、2010年度日本看護協会業務委員会が「外来看護」を「疾病を持ちながら地域で療養・社会生活を営む患者やその家族等に対し、安全で・安心・信頼される診療が行われるように、また、生活が円滑に送れるように調整を図りながら看護職が診療の補助や療養上の世話を提供することをいう。」と定義したことを紹介した。「世話」と共起関係にある語に「疾病」、「安心」、「送れる」、「営む」、「円滑」が描出され、「安心」は「安全」、「持つ」と、「円滑」は「補助」、「補助」



は「診療」とも共起関係にあったことを鑑みると、外来看護の定義に含まれる語が共起ネットワークを示していたともいえる。共起ネットワークは外来看護論での学びを分析した結果であるため、外来看護の定義が、外来看護論での学びの基盤になっていると考える。

外来看護論の授業では、外来看護の本質の理解につなげるため、外来における患者のニーズをとらえると同時に看護の機能や連携の実態を理解する目的で、研究論文をもとに考察するという個人ワークの機会を設定した。図2の共起ネットワークでは「患者」と共起関係にある語句として「必要」、「時間」、「医療」が描出され、「医療」とは「連携」、「治療」、「地域」が共起関係にあった。授業の内容と本研究結果を鑑みると、学生が個人ワークの中で、外来において患者は何を必要としているのか、限られた時間の中で患者とどう関わるのか、他職種と連携してチーム医療を行い、地域につなげていくには何が必要かなどの問いについて主に考察していたことと関連していると考えられる。

外来特有の語句に着目すると、「受診」、「診療」、「在宅」、「診察」、「対応」、「待ち時間」、「短い」、「短縮」、「部門」、「通院」、「場」、「問診」が出現していた。これらの語句が出現した理由として、外来看護論の授業の中で、厚生労働省の受療行動調査を分析したことや、連携病院の外来師長より外来看護の実態について講義を受けたことが考えられる。しかし、出現回数は多くはなく、共起ネットワークにおいてもほぼ描出されなかったことから、外来看護の実態を他の概念と統合させて考察を深めたり、展望を導いたりすることに至っていない。つまり、先述した研究論文を用いての個人ワークにおいては、患者のニーズや患者との関わりについて「外来」という条件を加えて考察していたといえるが、外来特有の語句の出現の様相からは、外来看護の実態を帰納的に考察することは比較的少なかったことが推測される。

「生活」は125回の出現回数があるにもかかわらず、共起ネットワークには描出されなかった。この結果から、レポートの中で「生活」は独立した語句として使われていたか、他の語句と結びつけて使われたとしても、一定の傾向は認められず、多様な語句と結びつけて使われていたと推測される。ヴァージニア・ヘンダーソン<sup>15)</sup>が、「看護師の第一義的な責任は、患者が日常生活のパターンを保つのを助けること」であると述べているように、看護は患者の日常生活にアプローチすべきであり、外来看護の場においては特に、患者の生活をありのままにとらえていくことが重要である。今回、外来看護論の授業が「生活」に着目するきっかけとなっていたと考える。

## 2. 今後の外来看護に関する教育のあり方

看護基礎教育において、特に学士教育の中では看護学の理論に基づいた実践や研究を教授する。それは実践の場を超えて、あるいは時代を超えて普遍的なものが中心となる。外来看護の場においても、理論に基づく看護のスタンスは変わらない。しかし、学生の外来看護についての学びが外来の実態把握や既存の外来看護の定義に留まる、あるいは「生活」が他の語句と結びつかない原因は、理論に基づいた外来看護の方法論が具体化できないところにあると考える。外来看護論の学修目標には、患者・家族の様々なニーズや医療に関する国民のニーズについて考えることを掲げており、外来看護論の授業の中では、研究論文<sup>16),17)</sup>や事例<sup>18)</sup>を紹介したり、臨床の外来部門の看護師長をゲストスピーカーとして招聘し、外来看護の実態についての講義を依頼し、外来看護をイメージさせる取り組みをした。しかし、外来看護の一部分のみをとらえるに留まり、先述のとおり、統合的、帰納的な考察をするには至らなかった。看護基礎教育全体を通して演習や実習は少ないため、学生自身が経験から学ぶという機会が少ない。国民の疾病構造や診療報酬制度をはじめとする政策から大きな影響を受け、機能自体が刻々と変化していく外来の場であるからこそ、実践を通して現場を実感し、その状況下でよりよい看護を検討することの必要性を痛感する。

なお、外来看護を取り巻く複雑な状況を鑑みると、普遍性を導き出すことは容易ではない。それゆえに、臨床現場との連携の下、外来看護について帰納的に分析し、多数の事例から一般的な結論を導き出す研究を行うことが今後の課題である。課題に取り組むことで、外来看護の包括的、体系的なアプローチを臨床現場へ還元できると考える。

## Ⅵ. 本研究の限界

本研究は、外来看護論の成果を授業終了時のレポートのみでとらえているため、実態を明らかにする、あるいは外来看護の教育のあり方を考察するには、かなり限局されている。外来看護論の成果が出現する状況として、臨地実習で入院患者を受け持つ際に、患者の入院前の外来での経過を把握する、退院支援などの計画を立案・実施する、あるいは訪問看護を受けている患者の外来での経過を把握するということが考えられる。したがって、今後は外来看護論が実践にどのように活かされていくのかについても調査を行い、外来看護論という科目の位置づけ、授業展開の方法、外来看護の教育等を見直し、検討・改善につなげたいと考える。

## Ⅶ. 結論

本研究は「外来看護論」の履修における看護学生の学びを明らかにすることを目的に実施した。対象は、本学看護学科の2017年度3年次開講の「外来看護論」を履修した学生43名のうち、レポートを提出し、研究参加に同意の得られた42名とした。

42名分のレポートをテキストマイニングの方法で分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 全レポートにおける語句の出現回数は、「看護」725回、「外来」601回、「患者」595回と圧倒的に多く、共起ネットワークにおいても中心性が高かった。これらの概念は外来看護論の核を担っており、学生らに強く認識されたといえる。
2. 「世話」は高頻出語ではなかったが、共起関係にある語句に「疾病」、「安心」、「送れる」、「営む」、「円滑」が描出された。また、「安心」は「安全」、「持つ」と、「円滑」は「補助」、「補助」は「診療」とも共起関係にあった。これは日本看護協会が示した外来看護の定義との関連が強いと考えられ、外来看護論での学びの基盤になっていると考える。
3. 共起ネットワークでは「患者」と共起関係にある語句として「必要」、「時間」、「医療」が描出され、「医療」とは「連携」、「治療」、「地域」が共起関係にあったことから、外来看護論の授業の中で行った個人ワークが関連していることが示唆された。
4. 外来特有の語句としては、「受診」、「診療」、「在宅」、「診察」、「対応」、「待ち時間」、「短い」、「短縮」、「部門」、「通院」、「場」、「問診」が出現していた。これらの語句が出現した理由として、外来看護論の授業の中で、厚生労働省の受療行動調査を分析したことや、外来師長による外来看護の実際についての講義を受けたことが考えられる。しかし、出現回数は多くなく、共起ネットワークにおいても描出されなかったことから、外来看護の実態を他の概念と統合させて考察を深めたり、展望を導いたりすることは少なかったと考えられる。
5. 「生活」という語句については125回の出現回数があるにもかかわらず、共起ネットワークには描出されなかったことから、レポートの中で「生活」は独立した語句として使われていたか、他の語句と結びつけて使われたとしても、一定の傾向は認められず、多様な語句と結びつけて使われていたと推測される。

## 文献

- 1) 数間恵子(編著). The外来看護 時代を超えて求められる患者支援. 第1版. 東京. 日本看護協会出版会. 2017 : 134-151.
- 2) 藤原英子, 金野順子, 鈴木美智子, 菊池ひとみ, 佐々木美江子. 外来スタッフの看護倫理に対する意識の向上を目指して. 全国自治体病院協議会雑誌. 2015 ; 54(6) : 940-943.
- 3) 松村優子, 藤本夏鈴, 清水倫子, 高橋亜紀子. 救急外来看護師の倫理的行動力を高めるための取り組みの効果. 日本看護学会論文集 : 急性期看護. 2015 ; 45 : 321-324.
- 4) 佐藤千春, 池田千鶴子, 猪股ワカ子, 佐々木早苗, 速水満子, 佐藤啓子ら. 外来看護師の接遇に対する意識調査. 由利組合総合病院医報. 2015 : 25 : 5-7.
- 5) 三輪礼子, 伊藤ふさ子. 外来看護師への接遇教育の変化 接遇教育による意識の変化から. 名鉄医報. 2012 ; 52 : 94-98.
- 6) 榎本沙織, 末永佳奈子. 外来看護師の初診患者対応時の看護実践能力向上への教育的効果. 日本看護協会論文集 : 看護教育. 2016 ; 46 : 254-257.
- 7) 富山かおり, 廣内玉井, 新居由美子, 関千尋, 大平志津. 外来看護師の採血場面におけるプレパレーションの変化 勉強会前後の比較. 香川県看護学会誌. 2010 ; 1 : 20-24.
- 8) 白坂真紀, 桑田弘美. 小児科外来実習における看護学生の学び. 滋賀医科大学看護学ジャーナル. 2014 ; 12(1) : 61-64.
- 9) 砂見緩子, 北村奈津子, 本多和子, 梶原倫代, 高田由美, 村松真千子ら. 基礎看護学実習における外来実習の学習成果と課題. 帝京大学医療技術学部看護学科紀要. 2010 ; 1 : 81-90.
- 10) 中田芳子. 外来看護実習での学生の学び. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集. 2006 ; 15 : 22-32.
- 11) 茂野香おる(著者代表). 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学 [2] 基礎看護技術 I. 第16版. 東京. 医学書院. 2017 : 288-289.
- 12) 矢永勝彦, 小路美喜子. 系統看護学講座 別巻 臨床外科看護総論. 第10版. 東京. 医学書院. 2015 : 244-257.
- 13) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析. 初版. 京都. ナカニシヤ出版. 2014 : 19-24.
- 14) 前掲書13), 139.
- 15) ヴァージニア・ヘンダーソン(著), 湯楨ます, 小玉香津子(訳). 看護の基本となるもの. 新装版. 東京. 日本看護協会出版会. 2009 : 14.
- 16) 廣川恵子, 大久保八重子, 植田喜久子. 看護実践から見出した外来看護師の能力. 日本赤十字広島看護大学紀要. 2008 ; 8 : 21-29.
- 17) 佐藤三穂, 鷺見尚己. 通院がん患者の支援に対する外来看護師と他職種・他部門との連携の実態. 日本がん看護学会誌. 2015 ; 29(2) : 98-104.
- 18) 平成25年度老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業 地域包括ケアシステムの構築に係る自治体の取組状況の整理・分析に関する調査研究事業報告書. 地域包括ケアシステム事例集成. 東京. 日本総合研究所. 2014 : 69-75

## Learning outcomes of nursing students in an “outpatient nursing theory” course

Yoko Sumida, Takako Izumi, Ikumi Murakami

*Department of Nursing, Faculty of Health Science, Morinomiya University of Medical Sciences*

### Abstract

This study was conducted to elucidate the learning outcomes of nursing students in an “outpatient nursing theory” course. The subjects were 42 students taking a third-year course in “outpatient nursing theory” offered in 2017 by the Department of Nursing of our university. The theme of this study was “knowledge learned through outpatient nursing theory” and all reports written after completion of the classes were analyzed by text mining using the text data analysis software KH Coder.

The analysis revealed that the terms “nursing,” “outpatient” and “patient” appear at an overwhelmingly high frequency and have strong centrality in a co-occurrence network. The term “care” did not appear very frequently; however, “disease,” “peace of mind,” “delivering,” “practicing”, and “smooth” were found to have a co-occurrence relation. Co-occurrence relations were also seen between “peace of mind”, “safe” and “having” “smooth” and “support”, “support” and “medical care.” These terms are believed to have a strong association with the definition for outpatient nursing presented by the Japanese Nursing Association. The results of the co-occurrence network also revealed that students considered patient needs and interactions with the additional condition of “outpatient” however, the mode of appearance of terms specific to outpatient care suggests that relatively few students inductively considered the actual state of outpatient nursing. “Life” was used as an independent phrase in the report, even if it was used in conjunction with other phrases, a certain tendency was not recognized and it is presumed that it was used in conjunction with various phrases.

The inability to substantiate the methodology of theoretical outpatient nursing was cited as an educational issue related to outpatient nursing. This finding suggests that students might need to personally experience outpatient nursing through practice and build experience in examining better nursing practices under these circumstances. It is also important that students inductively analyze outpatient nursing in cooperation with clinical sites and engage in research to elicit general conclusions from multiple cases.

**Key words:** Outpatient nursing, Nursing student, Basic nursing education

